

書評：Love, "Race over Empire"における、20 世紀転換期のアメリカ領土膨張政策決定過程の人種表象問題：ハワイ史研究の立場からの批判 **【訂正参考版】**

(Book Review) Racial Representation Problems of the U.S. Territorial Expansion Policy Decision-Making Process at the Turn of the 20th Century, in Love's *Race over Empire: Critical Comment in the Context of Hawaiian History*

金澤 宏明

Eric T. L. Love, *Race over Empire: Racism and U.S. Imperialism, 1865-1900* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004), 245 pp. \$55.00 (cloth). ISBN 0-8078-2900-5. \$19.95 (paper). ISBN 0-8078-5565-0.

19 世紀から 20 世紀にかけてのアメリカ合衆国の海外膨張政策、海外領土の獲得をめぐる「帝国主義論争」において、人種概念が果たしてきた役割については、今日に至るまで研究者の間に大きな関心を引き起こしてきた。例えば外交史研究家ウェストン (Rubin F. Weston) は、しばしば帝国論者が劣等人種の文明化や「白人の重荷 (White Men's Burden)」といった言説で非白人人種を救う、ないし導くという考えのもと、20 世紀転換期のアメリカ海外膨張を促進してきたと解釈した。また外交史家ハントは、このような人種差別主義などのイデオロギーが実際にどのように帝国主義に機能していったのかを実証的に把握しようとした⁽¹⁾。

近年ではカルチュラル・スタディーズの視点からアメリカ帝国主義を検討する研究が蓄積されてきている。ポスト・ヴェトナム、ポスト・コロニアリズムの言説はそれまでの対外関係史への再検討を促すと同時に、従来の政策決定過程の解明を中心とした伝統的アプローチや、60 年代以降のニューレフト史家による経済史的視点を重視した修正主義的アプローチに対し、新たな地平を切り開いてきたと言える。新たなカルチュラル・スタディーズ研究は、20 世紀転換期のアメリカ膨張を分析する研究においても、マッキンリー大統領や当時の政策決定者が示した「男らしさ (Manhood, Masculinity)」に焦点をあてたり、人種差別主義がいかに帝国ないし帝国主義政策の形成に影響を与えたのかを論じたりしてきた。こうした研究動向に対して、イースタン・イリノイ大学の黒人史研究者ウェイリーは、多くの歴史家がポスト・ヴェトナムとポスト・コロニアリズムの言説のような現代の思考パラダイムに影響を受け、アメリカの過去の罪を過大に意識する余り、人種差別主義と帝国主義を非難し、この二つのイデオロギーを一体化してしまったと指摘している⁽²⁾。

本稿で書評の対象にするコロラド大学の歴史学準教授であるエリック・T・L・ラヴ (Eric T. L. Love) の研究は、こうした解釈に疑問を呈し、19 世紀末葉から 20 世紀初頭におけるの帝国論者と反帝国論者が実際にどのような言説を用い、政策を遂行し、帝国主義を推進したのかを論証し、これまでの解釈に修正を試みようとする意欲的な研究である。ラヴは上に述べた先行研究によって、対外政策決定者の意識に「白人の責務」「慈悲深い同化」(Benevolent Assimilation)、社会進化論など、人種差別意識に基づくレトリックが帝国主義を後押ししたとい

う解釈が歴史学研究の上でコンセンサスとなったと指摘する。すなわち、こうしたいわば白人優越（white supremacy）意識を帝国主義の不可欠な要素とする見方を固定化したとラヴは主張するのである。これに対し、彼は人種差別主義が帝国主義の推進力として機能したという解釈を批判し、むしろ人種差別主義は反帝国論者が帝国論・膨張論・併合論を攻撃する手段として唱道したことを実証しようとしている。言い換えれば、彼は「白人の重荷」や社会進化論が、むしろこの時代の帝国主義を促進したどころか、海外膨張の防波堤となったと主張するのである。

こうした仮説を論証するため、ラヴは以下の四点に注目している。第一に、帝国建設を推進した主要な対外政策決定者の役割を再検討すること。第二にアメリカ帝国主義が海外進出に際して武力を行使したことは、道徳的に間違っていたという主張を否定すること。というのも、この主張は多分に現代の価値基準に合わせて当時の政策決定者の思考と行動を意図的に解釈したに過ぎないからである。第三に人種イデオロギーよりも正確な分析概念を使用すること。最後に帝国主義政策における「白人性（whiteness）」の機能を検討することであった。

ラヴは以上の諸点を検討する前提として、人種差別主義を人種観に基づく権力関係として定義し、これがアメリカの社会階層性や白人の優越という信念を下支えし、アメリカでの「国民の創生」の一助となったと考えた。ポスト・コロニアリズムの言説において、「他者へのまなざし」を持つことにより多くの人種の言説が非白人に向けられ、彼らを抑圧・支配し、アメリカ化する「白人の重荷」に焦点があてられ、こうした状況が帝国主義を正当化したと先行研究では把握していた。しかし、ラヴはむしろこれを否定し、「白人性」がこの時代の人種概念の中心であり、非白人を編入し統治する海外領土膨張政策の正当化は強い抵抗に直面したと論じた。このような拒絶にあったため、帝国論者が帝国主義を推進していくために、非白人を巡る人種議論を最小限に留めたとラヴは主張したのである。

第2章で扱ったサント・ドミンゴの併合の例では非白人の編入が受け入れられず帝国論者は敗北した。第3・4章で扱ったハワイ併合では、白人がマイノリティであるにも関わらず、その事実を無視して「白人性」を強調する戦略を採ったが、現実的には日本脅威論の高まりとスペイン=キューバ=フィリピン=アメリカ戦争による国内世論の盛り上がり、及び過半数の賛成で成立する合同決議案という議会戦略を通して達成されたのである。第5章のフィリピン領有については、戦時ナショナリズムの高揚とスペインの「誤った統治」への批判、合衆国の世界国家への展望、ドイツ・ロシアによるフィリピン獲得への脅威論と日本とイギリスからの外交圧力が帝国主義政策に有効に機能したことを指摘したのであった。

以上がラヴの著書の主要な要点であるが、ここで評者はアメリカ対外関係史研究とハワイ地域研究史の立場から第3章で対象にしたハワイ革命期（1893年）とそれ以前のハワイ史、および第4章、ハワイ併合（1898年）を中心に議論を進めたい。ハワイ史研究では、アメリカのハワイ併合論争において、この島嶼領土に居住する非白人種の編入及び彼らへのアメリカ市民権の付与と、ハワイを将来連邦の正式な加盟州とすることに対して人種差別に基づく反対意見がだされたことを、反併合論者が「観念的な抑止力」として利用したとする先行研究がある⁽³⁾。ラヴは、ここにとどまらず、ハワイに在住するアメリカ系白人の「白人性」を踏まえて、帝国論者と反帝

国論者双方の利用した人種レトリックを検討する。まず彼は、アメリカ人にとって、ハワイの非白人要素 [= 先住ハワイ人や安価な労働者として流入していた中国人・日本人など] が併合を阻害する要素として捉えられたことを指摘する。それまでハワイに流入し、政府の要職への就任や砂糖プランテーション経営などによりハワイの政治・経済を担っていたアメリカ系白人は、ハワイ革命で先住ハワイ人の王国を転覆し、暫定的に彼ら自身の政府を樹立し、ハリソン政権とハワイ併合条約を締結した。彼らは当初、先住ハワイ人や低所得階層であったポルトガル移民を劣等人種と見なし、後者に至っては白人のカテゴリーに含めることを否定していた。しかし、カール・シュルツら反帝国論者の運動により非白人人種に対しアメリカ市民権を付与することが拒まれると、アメリカ系白人革命者らはハワイ人が司法制度、公教育において基本的にアメリカ化していると主張し、白人の割合を上昇させるためポルトガル人を文明化した白人として捉え直した。またその一方で、中国人や日本人は、契約労働期間の終了後、ハワイから排斥できると考えたのである。

こうした併合戦略を連邦議会の帝国論者も採用したが、結局彼らは反帝国論者の非白人人種存在を根拠にした併合反対を打ち崩せなかった。それは南北戦争以降のアメリカ社会が国民の一体化を主張しながらも、現実にはインディアンと黒人を排斥し、白人労働者階級からの強い働きかけで中国人移民排斥法を成立させ、「白人性」を国民概念とする一方で、アメリカ市民に適さないと彼らが判断した非白人を排除する傾向にあったからである⁽⁴⁾。このため、ハワイ併合論者は人種概念を用いた併合論を最小限に留め、前述したような他の政治・経済戦略を強調する方向へと向かったのであった。

以上のラヴの論点に対して、三点疑問を提示したい。まず、先住ハワイ人の扱い方についてラヴは的確ではない。1850年代より、併合交渉・互惠条約交渉を経て、アメリカは常に先住ハワイ人の国家と政府間交渉を行ったのであり、先住ハワイ人のイメージや実態が繰り返しアメリカへ報告されてきた点を見落としている。先住ハワイ人が司法、教育においてアメリカの体制を模倣し、キリスト教化した文明国家であるという言説は当時から存在しており、1893年からのハワイ革命期においても、強固な併合論者モーガン上院議員のレポートですでに示唆されていた。またこのレポートの中で、中国人と日本人の参政権を排除する政治戦略が提言されていた。つまり、ハワイ併合論者は、ハワイの非白人要素を検討するとき、それまで主権国家を維持していた排除できない先住ハワイ人と、労働移民として流入していた東洋系移民に異なった基準を適用したのである。モーガンら併合論者は、議会報告書や主要な雑誌において、しばしば戦略的に「文明化し、アメリカ化し、キリスト教化」した先住ハワイ人をアメリカ市民権に適格な人種として見なしたのである。つまり、アメリカ市民のカテゴリーに先住ハワイ人を含めることに同意していたのである。モーガンが提案した人種問題の戦略的な解決がなければ、ハワイ併合は別な局面を迎えた可能性もあろう。

次に混血ハワイ人の存在である。ハワイへのアメリカ人の渡航が始まって以来、多くの外国人が流入し、異人種間結婚が早い段階から進み、混血ハワイ人の割合は増加した。人口統計上、混血ハワイ人は先住ハワイ人と共に計上されたが、1896年のセンサスでは学校に就学している生徒数7,748人のうち先住ハワイ人が3,048人、混血ハワイ人が1,152人を占め、彼ら全体で総生徒数の54%、混血ハワイ人だけでも14%を占めた。前者の26%、

後者の 69%は英語の読み書きができ、ハワイ人学生全体の約 85%がハワイ語の読み書きができた。このような混血ハワイ人は、キリスト教を信仰しアメリカ司法制度のもとで生活しており、ハワイがアメリカ化していることの証左と捉えられ、先住ハワイ人への市民権付与が妥当であるという議論に直結したのである(5)。

最後に、モーガン上院議員(アラバマ州選出)のような併合論者の解釈をどのように捉えるかに問題がある。ウェイリーや外交史家ヒーリーも認めるように、ラヴは、彼の主張を論証するため、幅広い帝国主義・反帝国主義レトリックを検討した。トーマン大統領図書館に勤務する 19 世紀後半の国務長官 J・W・フォスターの研究者であるデヴァインもまた、ラヴ自身が先行研究に一撃を加えたとすることを大げさな表現であると考えながらも、帝国主義者・反帝国主義者の双方の論を丁寧に追ひ、政府資料、マニスクリプト・コレクション、政治的指導者と外交官の自叙伝、同時代のジャーナリストの論説、その当時の主要人物の記事と出版された演説などを詳細に検討したことを評価する⁽⁶⁾。しかしながら、ラヴはモーガンを重要な膨張論者と位置づけながら、イースト・ジョージア大学の南部史家アップチャーチが指摘するように、「南部」の膨張論者が帝国主義政策にどのように参与し、影響力を持ったのかを検討していない⁽⁷⁾。前述のように、南部の膨張論者が単純に非白人人種存在を意識的に軽視したわけではなく、むしろ積極的に獲得地の人種状況を検討し、実情に即した併合戦略を生み出していたと考えるべきである。この点から、ラヴはモーガンに代表されるような南部人及び民主党議員の立場を捨象しているように思える。

さらにアップチャーチは、ラヴが帝国主義政策の進展におけるキリスト教伝導の役割とアメリカ帝国主義とヨーロッパ帝国主義との比較を行っていない点を指摘している。ハワイについては、膨張論者のみならずアメリカ建国理念に散りばめられたピューリタニズム的価値観と前述したようにハワイの「キリスト教化」というレトリックの相互関連性についての検討が必要であろう。また、「白人性」を強調しているラヴの研究に、ヨーロッパの帝国主義との比較検討がどれほどアメリカ外交政策における人種理解に寄与するかは図りかねるが、この視点がヨーロッパ諸国とは異なった諸相を持つ共和制国家アメリカの帝国主義という視点をより深化させる可能性はあるのではないかと。

外交史家ヒーリーが指摘するように、ラヴのこの研究は、社会進化論や「白人の重荷」のような人種概念が、後にアメリカ植民地主義を正当化する際には機能したが、当時の実際の政策決定過程においては植民地獲得を主導する政治議論として作用していなかったことを示唆する⁽⁸⁾。しかしながら、このような批判の上でも「白人性」についてのラヴの指摘は、海外領土膨張における島嶼領土の非白人人口への市民権付与がアメリカの国民創生議論に根本的に迫る論題ゆえに重要であり、さらなる精査が必要であろう。特に、経済史家ヴェッサーが指摘するように、アメリカの人種概念の形成と国民の創生問題を政策決定者や著名人のレトリックばかりでなく、同時にマシュー・F・ヤコブソンのような研究者が提起したように移民・大衆側の視点からも検討することは大きな課題である。ラヴの視点に含まれなかったこの問題には、ラヴ自身ばかりでなく、彼が批判する研究者を含め、向かい合わなければならないだろう⁽⁹⁾。またアップチャーチは、この研究が反帝国論者の強い人種差別主義を示していることによって、ジム・クローがアメリカの人種差別主義の持つ特異さの現れとしてではなく、20 世紀転

換期の一般的な時代精神の一つの現れになっていたことを示唆する脈絡を形成することが可能になると指摘する。以上の諸点については今後、ラヴやこの時代のアメリカ対外関係史研究者が研究を深化させなければならない課題である。

(明治大学文学部助手)

注

- 1) Rubin F. Weston, *Racism in U.S. Imperialism; The Influence of Racial Assumptions on American Foreign Policy, 1893-1946* (Columbia: Univ. of South Carolina Pr., 1972); Michael H. Hunt, *Ideology and U.S. Foreign Policy* (New Heaven: Yale Univ., 1987).
- 2) Edmund F. Wehrle, "Race over Empire: Racism and U.S. Imperialism, 1865-1900 (Book Review)," *The Journal of Southern History* 72-3 (August, 2006):687-88.
- 3) Thomas J. Osborne, *Annexation Hawaii: Fighting American Imperialism* (Waimanalo: Island Style Pr., 1998; reprint of *Empire Can Wait*, Kent State Univ. Pr. 1981).
- 4) 南北戦争後、連邦政治において優越した北部共和党は、リンカーンの奴隷宣言以降共和体制下での国民の一体化を推進した。この政策のもと、インディアンや黒人のみならず、安価な労働者として流入していた中国人移民さえも含めて、人種・民族によらず平等なアメリカ国民というイメージが形作られた。しかし、その後実際には南部ではジム・クロウなど、黒人や非白人から選挙権を奪う運動が展開された。国民の創生と国民の一体化の位置関係については、例えば、樋口映美、中條隼編集『歴史の中の「アメリカ」』(彩流社、2006)、国内の国民の創生と国外や島嶼領土地域などへのアメリカニゼーションへの示唆があるものとして、油井大三郎、遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』(東京大学出版会、2003)など。
- 5) 金澤宏明「ハワイ併合問題再検討 - ジョン・T・モーガンの膨張論と人種統治政策を中心として -」『駿台史学』121 (2004/3) 55-56.
- 6) Michael J. Devine, "Race over Empire: Racism and U.S. Imperialism, 1865-1900 (Book review)," *The Journal of American History* 92-3 (Dec. 2005):1010-11.
- 7) Thomas Adams Upchurch, "Race over Empire: Racism and U.S. Imperialism, 1865-1900 (Book Review)," *Alabama Review* 59-3 (Jul 2005):221-22.
- 8) David Healy, "Feature Review: On the Limits of Racist Appeals (Book Review)," *Diplomatic History* 30-2 (April/2006):297-300.
- 9) Cyrus Veese, "Race over Empire: Racism and U.S. Imperialism, 1865-1900 (Book Review)," *The American Historical Review* 110-5 (Dec. 2005):1541-420; Matthew Frye Jacobson, *Barbarian Virtues: The United States Encounters Foreign Peoples at Home and Abroad, 1876-1917* (New York: Hill & Wang Pub., 2000). ; ヴェッサーはさらに、ラヴの研究が最後に示唆したが深く考察できなかった人種差別主義と門戸開放帝

国主義の関連性の重要性を指摘し、彼の研究の発展性を見ている。